支那の文獻に現れたる日本

東京高師教授
文學士　山口察常

一

日支兩民族の交渉はいつ頃から始まつたか判然しない。文獻の上で見ると支那史は非常に古く、日本史とは比較にならぬ程差が大きい。しかし最近の中華民國は、建國の紀元を一萬年二萬年の昔に求めるといふやうな荒唐無稽な說を流石に支持することは出來ないと見えて、新たに黃帝紀元を定めてゐる。之に從ふと支那の紀元は今から算へて約四千六百年前に當るわけで、我が神武紀元よりも約二千六十年程以前である。さすれば日支の接觸は、最小限を二千六十年、最大限を四千六百年前として、其の間に始められたといふことになるが、神武以前の交渉については遺憾乍ら史實の徵すべきものがない。我國で最も古い史書といへば日本書紀と古事記であるが、それすら神代の事については邈乎として捕捉する所がないのである。

それで何か支那の方の古書に材料がないかと思つて色々調べて見たが、支那では古く我が日本の事を、倭又は委奴、東夷などと云つた。其の倭に關する記述が一番古い所では「山海經」に出てゐる。即ち同書の十二卷には

「蓋ノ國ハ在ニ鉅燕ノ南倭ノ北ニ倭ハ屬レ燕ニ」

とある。此の「蓋」といふのは山東省の地名らしく、燕は禹貢に所謂古の冀州の地で、今日の北京を燕京といふのでも知られるが如く、あの邊一帶の名稱であつたのだから、蓋が燕の南、倭の北に當るとすれば、其の倭なるものは果して日本の事かどうか判然しない。

次に「禹貢」を見ると、其第九卷に「島夷」の事が出てゐる。清朝人の研究に係る「禹貢錐指」の解に從ふと、この島夷とは「倭韓以て之に當つ可し」といふのであるから、山海經を信じ、且つ此の解に依るとすれば、日本は古く支那から「島夷」と呼ばれてゐた事になる。

それから更に又、山海經の第九卷海外東經には、「君子國」の名が出てゐる。そして「君子國在ニ其北。衣冠帶劍。食レ獸。……其人好レ讓不レ爭云々」とある。これも今日尙支那人が我が國を君子國と稱するのと何等かの關係があるやうである。

それからズッと後世になつて後漢代に出來た王充の「論衡」中にある恢國篇には「成王ノ時……倭人

暢ヲ貢ス」といふ記載が見える。暢とは何を指すのか判然せぬが、香草だといふ鬯の事ではあるまいか。鬯は非常に香氣の高いもので、支那では宗廟の祭に神を迎へる時に、之を入れて釀した酒を地上に注ぐ習慣があるのである。しかし果して日本にそんな草があつたかどうかは明かでない。

後漢以後の支那の史書にはズッと引續いて日本に關する記事が出てゐる。即ち先づ後漢書の世祖記には、

「建武中元二年、倭奴國貢ヲ奉ッテ朝賀ス。使人自ラ太夫ト稱ス」

と見えてゐる外、同書には又別に「東夷傳」があつて日本の事が色々と出てゐる。是等の事は實際あつた事かどうか分らぬが、大日本史には垂仁天皇の八十六年に、使を漢に遣したと記されてゐる。しかしこれは朝廷から遣されたものかどうか判然せぬ。國史眼などによると、筑前から出た「漢委奴國王の印」といふ金印は、恐らく後漢の世祖光武が賜つたものであらうといふ。蓋し倭奴も委奴も同じ事で、委奴は又伊都に作り、怡土とも書くから、此の委奴國は、我國でいふ怡土郡の地方に當るのであらう。

後漢書に次いでは、魏史にも東夷傳があり、次の晉書にも同じく東夷傳があり、六朝になつて南齊書には倭國傳、梁書、隋書も同樣で、唐書以下には皆日本傳となつてゐる。斯ういふ風で、山海經の倭は日本の事かどうか明白でないが、東夷、倭國、日本と名稱こそ變つてゐるが、歷代の支那史には日本の

事がズッと一貫して書かれてるのである。そこで次には支那人の外國に對する考を見て、日本を古來どう考へてゐたかを見て行きたいと思ふ。

二

支那は自國を中華と稱して他國は凡て夷狄と考へてゐた。即ち四方に夷があると見て、其の東にあるものは東夷、西に國する者は西戎、北に蟠居する者は北狄、南に住む者は之を南蠻と呼んだ。これは可なり古くからの稱呼で、我が日本の如きも東夷の中に入れられてゐたのである。

そこで夷といふ字を調べて見ると、これは大の字と弓の字との複合で、大は人間の形を現した象形文字であるから、即ち人間の弓を持つてゐる形である。だから常に弓を持つてゐる慓悍武勇の人間を意味する事に成る。次に戎は戈に从ひ甲に从ふ字で、武人の形である。甲即ちヨロヒで身を堅めてた所から來てるのであらう。蠻、狄に至つては甚だ奇怪な字であつて、蠻は蝮を意味し、狄は獸篇に火で實はアカイといふ意味である。大方常に火を翳してゐたのであらう。兎に角東夷あたりとは大分見方が違つてゐるやうである。禮記の王制を見ると、「東方は夷なり」とあつて、其註に、鄭樵の通志の文句を引いて「夷ハ柢ナリ（木ノ根ヲ柢ト曰フ）仁ニシテ生ヲ好ミ……天性柔順」と書いてある。又東夷の說明としては、文獻通考の中にも「東夷ハ柔謹ヲ以テ風ト爲ス。三方ニ異ルモノハ……道義存ス」と出てゐる。

斯ういふ説はどうして出たのであらうかといふに、元來「東」といふ方角それ自身が有する意味に基くものであらう。即ち東方は日の出づる所で、四季の中では春に配せられ、草木茂生の意を寓してゐるから、自然其の風土の感化を受けて、民族も穩健な資性を持つてゐるといふ解釋であらう。字に書いても東は木の間に日の上つて來た所で、太陽將に上らんとして未だ中天に到らざる象である。「説文」によると「東ハ動ナリ、陽氣時ニ動クヲ春ト爲ス」とあつて東方即ち春の意を示してゐる。通志に「仁ヲ好ム」といふのも、東が生育を意味する所から來てると思ふ。又、詩經の大雅篇には「東ニ啓明有リ」などと云つてある。これは將來段々啓けて行くことを意味してゐるので、西北の闇黑に比べて明るい方面を示すものである。

一體倭といふ字にはどんな意味があるのか、それを知るには古い所から見ることが必要である。倭の音は無論イであるべきで、漢代最初の字書ともいふべき説文によると、「倭ハ順ノ貌」とあり、其の後に出た廣韻には、「倭ハ愼ム貌」と解してゐる。是等の解釋と東夷の解釋とを合はせると、當然君子國の意味合が出て來る。それから又論語に依ると、孔子が「道行ハレズ、吾九夷ニ居ラント欲ス」と言はれたとの事であるが、九夷とは東夷の九つに別れてることを指したのであつて、畎夷、千夷、方夷、黑夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷がそれである。是等の事を考へて、日本が東夷の一つで、そして其の東

夷なるものゝ説明が從順で仁を好むと成つてゐるとすれば、我が日本が當時の支那に相當理解されてゐたのではあるまいか。君子不老の國が直ちに日本とは云へないにしても可なり前から日本の眞相が分つてゐたのではあるまいかと思ふ。

三

以上に述べた所は、大體に於て古い記事で、少くとも草創時代又は建國以前の事に當るが、それが後世になると聊か説明が惡くなる。例へば元史の記事は、十萬の元兵中生きて還る者僅に三人といふ事件があつたのだから無理もないが、降つて明史あたりにも、太祖の時代に倭が「山東ニ寇シ、轉ジテ溫台明州ヲ掠」めたとあり、更に續文獻通考に依ると、結局「明ノ世ヲ終フルマデ、通倭ノ禁甚ダ嚴」とあつて、曩に君子國とか從順とか評したのとは引きかへて、恰も兇惡を事とする賊徒の如く考へてゐる。其の續きの文句には「閭巷ノ小民、倭ヲ指シテ相罵詈シ、甚ダシキハ以テ其ノ小兒ノ口ヲ噤スルニ至ル」とまで書かれてゐるが、これは實際に於て斯ういふ風に觀察が變つたものと見て可からう。

ともあれ、倭又は委奴を日本の事とし、それ等に關する各書の記事を相聯絡したものとして考へると、それ等は大和民族全體を對象としたものか、或は前のものは曾て九州の一隅に蟠居してゐた熊襲族のみを指したものでないか、頗る研究の餘地がある。從前問題に成つた魏志の卑彌呼は神功皇后の事と

して一般の書物には解釋してゐるが、しかし今日の研究では皇后の事とすると時代が違ふといふ事に成つてゐる。斯く日本に關する記事は色々あるが、私は支那書の日本關係の記事は、日本人全體のものであるにしても、又其の一部に限られた事としても、現代の支那人は之を日本民族全體の事として、是等の記事を憑據に日本人の事を考へるであらうと思ふ。

元來私は、日支兩國提携親善の道は互に誤解を除き去ることに存すると觀る者であるが、それをするには、假令正史にしろ、又は單なる記錄にしろ、誤つてゐる事は之を其儘放任しておかないで、これは日本人全體の事ではない、一部先住民族の事であるといふ事を確實に研究して、其の結果を公表し、飽くまでも日本民族の眞相を明かにしてかゝることが肝要であらう。

支那は甚だ修史事業の盛な國で、漢代以後王朝の變革がある毎に必ず前朝の史を編むのが慣例になつてゐる。それで現在の中華民國でも舊例を趁うて目下大勢で淸朝史を作つてゐるが、其の外國材料は大抵前史を踏襲するのがこれ亦例になつてゐて、我が日本關係の記事の如きも歷代の史書が殆ど皆一貫して大同小異の事を載せてゐる。だから我々から觀て餘り感心せぬ誤りの記事は、今日に於て之を洗錬して置くことが必要であると思ふ。

それで私は倭の記事についての批評を聊かこゝで擧げて見たい。鄭樵の通志を見ると、(一)酒を嗜む

こと、（二）大人を見て之を敬ふこと、（三）壽老多きこと、（四）一夫多妻なる事、（五）婦人は淫せず妬まざること、（六）同姓は娶らざること、（七）婚姻の時新婦は夫家に入るに先づ火を跨ぎ而して後に夫と相見ること、（八）人は恬淡で爭訟の牢であること、（九）刑法上盜者は其の贓物を返せばそれでよく、償へぬ者は身を沒して奴隷とするといふこと、（十）罪を決する場合に小石を沸騰してゐる湯の中へ入れて原被兩造に各々之を探らせ手の燒爛れたものを曲とするか、或は蛇を缶中に置いて之を取らせ、嚙まれたものを曲者とすることを以て倭人の習慣だとしてゐる。これらについても我々の承認できない點は進んで之を正しておかねばならぬ。又、馬氏通考の記事の中には、法を犯す者は其妻子を沒し、重き者は其門族を滅すとあるが、これも確に日本人全般の事ではあるまいと思はれる。

所が宋あたりになると可なり日本の事が分つて居たと見えて、太宗が非常に我國を賞讃して、日本は一島夷に過ぎぬが、其の國王は一姓相受け、臣下も亦世官として其の職を傳襲してゐる。蓋しこれは古の道である、我が中國では唐以後絕えて又そんな事を見られぬのは甚だ殘念であるとの旨を述べてゐる。其の外の記事は大體通志に類したものであるが、比較的新しいものでは皇朝文獻通考に、佛敎を信じ祖先を敬ひ、名花佳果を得ても先づ佛僧に捧げてからでなければ食べない。法を立つること嚴で人と爭はず、法を犯した者は事が發覺すれば刑に當る前に輒ち自殺するといふ意味の事が出てゐる。又、童

僕を呼ぶのに掌を鳴らせば則ち然諾して來り、清潔好きでよく洗滌し、夫婦と雖も一つ椀で一緒に羹を啜らず、餘つた物は僕婢と雖も之を棄てゝ食べないとも書いてゐる。

これらに對しては勿論敢て不服を言立てる廉もないが、支那の正史の上から考へて、今までに列擧したやうに、支那では最初我國を東夷の中に含めて書き、次には倭國傳、日本傳といふやうに段々日本といふ國がハツキリと出されて來てゐる。我國の歴史を見ると、支那との交通は小野妹子が遣唐使として隋に行つたのが初まりで、それ以前には何の傳ふる所もないが、山海經などに倭が後漢に朝貢したといふやうな記載がある所から觀ると、少くとも朝廷側の公的交渉があつた以前、或る一部の日本人が漢土と交通して、若干の文化を受入れてゐた事は爭はれぬと思ふ。

日本の事を誤り傳へてゐるのには思ふに種々の原因理由が存する事であらう。それ等の事は今判然せぬが、支那では古く日本は吳の太伯の子孫だと云ふ說を唱へてゐる、これは支那歴史に依ると日本人が彼の國と交通するに當つて自ら太伯の子孫と號したといふ事である。太伯とは周の太王の子で、太王の三子中長が即ち太伯、次が仲雍、第三子が季歴で、即ち文王の父に當つてゐる。此の太伯は父の意を忖度して其の國を脫出し、陝西省から吳に赴いて後日本に行つたと傳へられてゐるのであつて、論語には太伯傳があり、孔子が口を極めて之を賞讃してゐる。果して事實か否かは勿論判らないが、吳と我國と

の間に交通があつたことは、今に吳服の名が殘つてゐるのでも知られる。兎に角支那に於ても、日本が太伯と多少の關係があると見て之を尊重したのかも知れない。

今一つは朝鮮の記事と日本との記事とが、支那書の上では頗る相類似してゐる。一部の書に倭韓と相對して書かれてゐるのはそれが爲である。これは朝鮮は殷の三仁の一人たる季氏が初めた國であるから、其季氏と太伯との類似關係から自然斯の如く倭韓を相並べて考へるに至つたものであらうと思ふ。日本を一方では東夷に列し乍ら他方では君子國と稱する理由も或は茲にあるのであらう。

日本を君子國と稱した例は、唐の玄宗皇帝が我が國使藤原清河を送る詩の一句に「因驚彼君子」とあるのが、實は君子國の意味で、其外には又、王維が安部仲麿を送つた詩序に、「服聖人之訓、有君子之風」といふ句が見える。又漢代に出來た淮南子にも、「東方ニ君子國有リ云々」とある。これは的確に日本の事だとは云へぬが、どうもそれらしく見えるのである。

新聞などで見ると、支那は日本に對して敵愾心を有し、屢々排日騷を繰返すとあるが、近く大正十四年五月三日の上海事件の時にも、可なり全國的な運動が起つて、北京では比較的秩序ある日貨排斥運動が行はれたに拘らず、實際はそれ程大した事ではなく、謂はゞ一部の煽動され易い學生が赤化された煽動政治家の手先に使はれたのに過ぎなかつた。そんな事よりも私が實際支那に行つて見て心配したの

は、支那の先覺者が今や頻に日本の眞相を研究しようと企てゝゐる事である。日清戰爭の翌年に王先謙が「日本源流考」を書いて、其の序文に、日本が幕府政治から王政の古に復したのは急轉直下だが實に目ざましい出來事である。因襲に囚れずして日本は能くあれだけの改革を遂行した。我々も大に目ざめねばならぬ。予が此の著を敢てした眞意はこゝにあると述べてゐるが、其れ以來支那では切實に日本を知らねばならぬとの思想が欝然として起つてゐる。現に支那の大學では一兩年前から日本語を新に第一外國語とする事になつてゐる。これは從來一般東方文學中にあつたのを近ごろ純粹に獨立させたもので、近く二三年後には專門家が出來るわけである。斯くして徹底的に我が日本文學を專攻する者が支那に輩出するのは誠に欣ばしい事であるが、私は此事を聞いて、これは日本でも迂濶ではゐられないと感じた。

私は支那內地を旅行して色々研究した結果、日本は到底支那無しには立てないと考へた。人口の盛に殖えることは結構であるが、斯くして十數年の後には土地の不足を感じなければならぬ日本が、支那を隣國に控へてゐるのは偶然でない。どうしても將來の日本は支那を其の立場とする外はないのである。しかし最早今日は武力や法の力を以てしてはいけない、相互に理解をし合つて、成るべく多くを入れて行くやうにせねばならぬ。さうしてそれをするには、先づ相互の歷史から理解してかゝる事が必要であ

るから、此の際誤傳を正して、眞相を理解させるやうにせねばならぬ。斯くしてこそ眞に深い根柢の上に立つた動ぎのない鞏固な提携が出來るのである。（文責、溝口生）

新春口吟

無題　齊藤精一

大禮完成歲復新。　干支己巳太平春。
古稀齡上更加五。　竊喜天恩及此身。

田家朝　橋尾實光

去歲穰々民意豐。　東村西郭太平風。
今朝定是春衣滿。　一叫晨雞瑞靄中。